

クダーにおけるシャム人とタイ仏教寺院： 寺院調査から（2）

黒 田 景 子

8. コタスター（Kota Star）地域の寺院

地域の特徴：クダー州の州都アロースターを中心とする地域である。市の人口は2005年現在で217000人。アロースターはクダー川の河口クアラクダーから約20km上流に位置し、1777年からクダースルタンの王宮がある。クアラクダーの海岸からアロースターにいたる地域は標高2～5mの低地で、クダーで雨季に相当する7月～10月には灌漑水路が発達した今も数年に一度洪水が発生し、1mから2m程度冠水する。アロースターから南西の沿岸地域はいずれも標高が2～4mの水田地域であり、古い村落や王都（コタ）はこの洪水原にある小丘陵群の周辺に成立していた。19世紀からスルタンとその重臣による運河が建設され、直線的水路が縦横に建設された結果、水田地域として灌漑整備され水路交通が整い居住が可能になった。水田農家は水路脇に集住する他、散村的に水田中の丘の周囲に存在する。1970年代以降は熱帯二期作を行っている。水田は Sawa Melayu とでも呼べる天水田に近いタイプで、雨季には完全水没する。沿岸部の農村部ではマレー人の人口密度が圧倒的に高い。この地域のシャム人はアロースター市内に居住し、また都市部には、華人の人口が集中する。



[写真9. コタスター周辺のココヤシに囲まれた独立農家]



[写真10. 19世紀半ばに建設された沿岸部の運河。]



[写真11. アロースターの空港敷地内には第二次大戦時のトーチカがまだ放置されている]



[写真12. アロールジャングス周辺の沿岸水田]



[写真13. アロースター市内、8月31日の独立記念日]



[写真14. アロースター旧市内の華人系商家]

1) Wat Bakar Bata

正式名称：Wat Samosonrachanupradit

位置情報：北緯6度8分19秒 東経100度22分98秒

標高：6m

立地と景観：アロースター市内の最も古い寺院である。クダー川は北のクバンパス川と南のプندان川が市の西で合流し、西部沿岸のクアラクダー河口にいたる。北と南の川の合流点は古いマーケットであり、華人街である。

Wat BakarBata は北への蛇行部を直線距離で2 kmさかのぼった川沿いにある。隣地はクダー州歴史博物館となる古い住宅地域である。

歴史と伝承：1910年の建立。クダースルタンの妻のタイ人女性がこの寺を建てた。彼女は初代マレーシア首相アブドゥルラーマンの母であり、結婚のためにムスリムに改宗したが、この仏教寺院を建てた。スルタンが信仰にこだわらず慣習として資金をだして寺を建てたため王立寺院'(Wat Luang) と同等に見なされている。

1960年にマレーシアとタイのサンガに指導をうけてバンコクからの長老僧を迎えた。低地にありしばしば冠水するため、1キロ先に移転する計画が持ち上がり、現在の Wat Telok wanjak が作られたがこの寺院にこだわりをもつ信者があり両者とも存続している。

僧 侶：1963年の記録では TokaiのWat Changdeen で出家したシャム人僧侶を住職としている。2009年現在は短期出家者を含んで4名。

寺院内施設：境内はさほど広くない。主たる施設は本堂と2005年に建立しまだ内装が未完成の講堂、旧講堂と台所、庫裡にしている二階建てのコンクリートの建物である。パダンセラやジトラの寺院のような光り物での装飾はなく、本堂前の5基の小パゴダが特徴的である。寺の名を記した門の看板もない。セーマー（結界石）の有無は不明。

多くの人が参拝に訪れる。僧侶の食事は当番制で地内の台所で調理をする。食事の世話人に聞くと殆どが地元の福建華人であり、タイ語を話せるシャム人はごく一部である。境内の堀沿いには20世紀前半からの華人の墓がびっしりと並ぶ。

寺院の掲示板の連絡も華語と英語である。

寺院で行われる在家の行事としてはソンクラーンとロイカトーンがある。川に接しているサーラーがあり、講堂には水に浮かべる多くのロイカトーンの灯籠が並んでいた。それに記される信者の名も圧倒的に華人である。

ロイカトーンこと、僧侶に新しい衣を捧げるカティナ祭では華人のための行事とシャム人の為の行事も別に企画されているようである。2008年の例では11月6日の晩は「泰式カラオケ」11月11日と12日は「華語カラオケ」の催しがある。境内の寄進像は歴代の住職像3体と仏座像、四面仏とその随神像としての象一對程度である。アロースターの外、ベナンなどからのシャム人や華人の参拝も多い。



[写真15. 本堂前の仏塔と華語の通知幕]



[写真16. ロイカトーンの灯籠が並べられた講堂]



[写真17. 当番制で僧侶の食事を作る華人とシャム人]

2) Wat Telok Wanja

正式名称：Wat Nikroramdang

位置情報：北緯6度7分52秒 東経100度22分28秒

標 高：7m

立地と景観：アロースター市内中心部のラウンドアバウト交差点の北西にある。敷地は広く12ライである。付近は住宅地で華人が多い。クダー川からの水路が敷地の一部を横切っているが川に面しているというほどではない。

歴史と伝承：もともと Wat Bakar Bata の移転地として1957年に政府が土地を提供した。クダーのタイ寺院のセンターオフィスとしての性格を期待されており、タイ政府からは35万バーツ、クダーのシャム人の資本家から7万バーツ、仏教徒からの寄付はまとめて55万バーツになった。アロースター内のシャム人200名ほどがここを支える。一方華人の参拝者も多い。

僧 侶：1963年時には僧侶17人，サミが20人。2009年は僧侶13名。

寺院内施設：2000年代に建築された三層屋根のタイ式コンクリート建築の本堂があるが、塀で囲まれていてセーマーはもたない。同じところに建てられた庫裡。パゴダ式の塔をもつ寺の門は1994年立。寺内の殆どの表記は華語とマレー語，英語である。

この寺院で特徴的なのは、敷地内の大きな納骨堂である。納骨堂の利用者はほぼ華人である。

また Kedah Buddhist Association（吉打佛学院）の講堂があり、Free Medical Clinic とも表記されている。この組織の活動は毎日夜8時頃からの無料医療相談，瞑想クラス，パーリ語読経，ヨガクラス，仏教学クラス，念仏，コースなどの社会奉仕活動である。

その他境内の寄付像は 観音。四面像。修業僧立像。創立僧侶像と祠。鐘楼。



[写真18. 地内の納骨堂。こちらに参拝する人が多い]



[写真19. ケダー仏学院 催しや教室が行われる]

3) Wat Bukit Pinang

正式名称：Wat Chaidee yaaram (Wat Chediiyaaram) タイ文字表記では前者だが後者が正式登録名称である。

位置情報：北緯6度11分99秒 東経100度25分98秒

標高：13m

立地と景観：クダー川の上流はアロースターの北東へ蛇行しておりその地域はランガーとよばれる古いマレー系住民の多い地域である。この寺はその中程のタイとアロースターを結ぶ朝貢路であるサイプリー道路（現一号线）が交差する Kepala Batas から2キロの交通拠点にある。北2キロに Kota Bikit Pinang, 北西3キロは Kota Naga というマレー王権の歴史的な中心地域である。19世紀の河川交通と朝貢路の交差点に近く、華人が多く住む一角である。東1キロの丘陵地に五皇廟があり、華人参拝者が多い。いわゆる沿岸地と内地の境に当たる交易中心であった。

歴史と伝承：伝承によると、この地域のシャム人はクダーがタイの朝貢国であった時代にタイに送る米を作る地域に居て、この地域に移住してきたという。タイのラーマ5世時代にここに

村ができたので、約165年と伝わっている。1963年当時でシャム人は20家、100人と人口は少ない。2008年時点では村全体で200名ほどで、マレー人、インド人、福建人も居る。僧侶の説明では、タイ人集落のあったところにマレー人が来て、その後華人が入ってきたという。

寺はムスリムの生鮮市場と華人の商店のある商店街に面していて、華人色が強いが、華人はほぼ福建語のみで暮らしており、華人男性がシャム人女性との婚姻を好むため混血が進んで、華人化するという。タイ語の話せる人はきわめて少ない。日本軍がマレーに侵攻してきたときは、この寺の中にキャンプをおいた。寺の裏に小規模運河があるが、この地域の人々の労働によるもので約50年前に作られた。この地域の人々は商店の他は水田と果樹の仕事に携わっている。

僧侶：僧侶は2名で、僧侶自身はタイのソクラーの Wat Anthong から来てすでに12年になるという。学校が休みの時期にサーマネン（少年僧）が出家をする。20名ほどである。成人の出家者の場合は、アロースターやバナナからやってきて3ヶ月の短期出家をする。ロイカトーンはおこなわない。

寺院内施設：寺院はコンクリート造りで1970年代の建築。タイ様式ではあるが本堂（セーマーなし）と庫裡。裏手に納骨堂があり、華人の参拝が多い。

寺院の看板はタイ語で書かれているが、タイ文字表記に並べて表記されるその音読表記が間違っており、本来名の Wat Chedii（仏塔寺）を Wat Chaidii（善心寺）と表記している。

施設としては 鐘楼とダトコンの祠がある。ダトコンは像ではなく文字でしるされて、土地神として参拝がある。



[写真20. 寺の看板]



[写真21. 寺に隣接するムスリム生鮮市場]

9. プンダン（Pendang）地域の寺院

地域の特徴：クダー中央部。クダー川（Sungai Kedah）支流のプンダン川流域低地から東側の丘陵にいたる間の丘陵間地である。1911年のセンサスではコタスター地区の一部として区割りされていた。半島沿岸部の水田がいずれも標高4m程度なのに対し、標高は13m～70m。大規模な運河はなく、水田は緩い自然傾斜を利用した、あるいは、集落レベルで掘削された小規模運河の水利による重力灌漑*方式である。桜井由躬雄（文学博士、農学博士）の示唆によれば、東北タイなどに見られる扇状地水田形式であり沿岸部の Sawa Melayu 水田ではなく、水田内に排水溝を有するタイ型の Na 水田である。事実、Pendang と Pdg Trap, Sik の各地域には Na（タイ語で水田）を冠した地名がしばしば散見される。水田は沿岸部のものに比べると一枚一枚の面積が小さく隣接する水田の段差は30センチから50センチである。このタイプの水田、果樹園、ゴム園がプンダン川やその支流にそった地域にひろがる Pendang 地域はクダー沿岸部のマレー政権からみると内地（Bukit）にあたり、20世紀前半でもいわゆる「バンディットエリア」

として認識されていた。19世紀以前のクダー政権が認識していたクダー国領域の歴史認識につながる興味深いヒントを含んでいるがここでは詳述せず、別の論文で論じる。

シャム人人口のもっとも集中するエリアでもあり、古い起源をもつタイ寺院の大半がこの地域にある。この地域には古くからつかわれる主要な陸路は少なく、20世紀前半までは、小河川による水路ネットワークが交通の中心であった。残されている地図で1939年の日本軍入手の外邦図ではアロースターからクアラヌランへの道路以外はほとんど河川利用かそれにそった小路で、現在の主要道路の基礎は1950年代になって地元住民の徴用などで作られた。その際、マレー農村のアクセスを重視する形で道路建設が進んだため、かつて交通（河川）の中心にあったシャム寺院や集落が却って交通の不便なところに位置するようになった経緯もある。もう一つ地域の特徴を上げておきたい。それはパルミラヤシの存在である。本来東北タイやバガン平原などの熱帯サバンナの植物であるパルミラヤシは花柄から樹液をとり、それを一日醸すことで薄い酒として利用するのが古い形態である。クダーでは花柄に竹筒をつけて地面までその樹液を採取するシステムが1988年の Titi Akar では見られた。パルミラがクダーからもっとも近くで見られるのは南タイの米どころパタルン県（煮詰めて砂糖としても利用）である。南タイからの移住者によってこれらのパルミラが運ばれシャム人集落に特徴的に見られるのはシャム人の移住経路をかんがえる上で重要な情報である。

* 重力灌漑=地形の高低差を利用し、傾斜に従って（重力によって）水を受益地まで導く灌漑方式（星川圭介「フィールドで見える・情報学的手法で解く 東北タイにおける稲作変化の軌跡」『東南アジア研究』46巻4号 2009年3月 p.566



[写真22. Titi Akar 周辺の Na 型水田]



[写真23. パルミラヤシが存在するのはシャム人集落の周囲のみである]



[写真24. Titi Akar の野焼き風景]



[写真25. 水田面積も沿岸部に比べると小さいが現在は同じくコンバインでの収穫を行っている]

1) Wat Senara

正式名称：Wat Jindaram

位置情報：北緯6度3分67秒 東経100度32分99秒（補正必要）

標高：20m

立地と景観：クダー川をさかのぼるとアロースターで北と南に別れ、その南への水路は低地を蛇行しながら内地にむかい、Sungai Tajar と分岐合流しながら、Sungai Pendang と名を変える。さらに Sungai Nawa. Sungai Titi Kera と分岐して、現在

は、20世紀後半に掘削誘導されたパダントラップ川 (Sungai Padang Trap) につながるが、1940年代の地図によれば、Sungai Nawaと Sungai Titi Kera はさらに内陸の水路に繋がり、Wat Senara こと Tha Nara に至る。Tha Nara はタイ語で目立つ田 (Na Raa) あるいは、畑田 (Na Rai) の船着き場、の意味と思われる。この地はより上流の内陸低地のタイ人集落をつなぐ物資の集積地、水運の拠点であった。1939年の地図では、同じくタイ人集落の集中する Padang Kerbau 方面からの陸路、南部の Padang Peliang 方面からなどの陸路の終点である。Tha Nara の上流の Kubor Panjang は大きなマレー人村落だが、この一帯は19世紀のタイ軍との戦闘の記憶があり、パタニからのマレー系移住者の伝説を持つ村がある。また、マレー村落の地名にもタイ語名が見られるようにタイ語話者ムスリムであるサムサムマレーの居住地とも入り交じっている。

Wat Senara は現在の幹線道路K127号線を Bukit Payang から南下し Kg. Kubor Panjang と、Kg Lahar Tunjang を過ぎたT字路を東に入る。マレー人開拓村の FELDA の村落と大きなモスクをさらに奥にはいった行き止まりのやや小高い場所に位置する。その先は低地の水田と河川である。マレー系住民の多い開拓村 FELDA のさらに奥にタイ寺院とシャム人村落が存在するパターンはしばしばクダーで見られる。

歴史と伝承：伝承によればクダーがサイブリーと呼ばれていた時代から存在していた寺で、約200年の歴史があるとされる。寺の脇の水路はアロースターとつながっており、華人商人がアロースターに貨物を送った拠点である。同時に、アロースターからは参拝に来る者も多く、また、遺体も船で運ばれてきて、ここで焼かれた。48才の僧侶は幼少時にまだ、水

路に貨物の船が行き交っていたのを覚えている。

寺を開いたのは大陸中国出身の華人僧侶で、4代まで続いたが、その後還俗した。周囲にはもともとシャム人集落が多くあったという。

第二次大戦中、日本軍が来るというので、村民は集められて kg. Thai Talat (= kg Namgka Siam) へ集められ、一時寺は閉鎖された。村の古老の意見では、寺が閉鎖されたのは僧侶が大陸中国出身の華人であったからだという。付近のシャム人集落とともにニュービレッジ政策による強制移住時期の後、しばらく後に村に人が戻ってきた。その後も寺はしばらく住職がいない状態が続いたので長らく廃寺と記録されてきたが、2003年に二人のシャム人僧侶が住み着き、復活した。寺には近所のシャム人の村 Tok yom Tok Tiam = (kg. Bukit. Patpong) の村人30家族が当番制で食事を運んでくれる。村自体は40家族ほどである。

僧侶：僧侶 2 名，サミ 5 名。

寺院内施設：境内は広く大きな木が多い。古い木造の庫裡と本堂の廃墟が保存されている。コンクリート製の柱と階段しかのこっていない。新しい本堂と庫裡を2003年に再建し、台所と水の整備をおこなったという。庫裡の様式は特にタイ的な装飾が施されたものではないが、本堂はタイの建築様式によるものである。セーマーはなく、塀で囲われている。幼稚園が併設。タイ語を教えるための漆喰作りの文字表や「Tham dii dai dii, Tham chua dai chua（善きことをすれば善き結果が得られ、悪しきことをすれば、悪しき結果となる）」という典型的なタイの在家仏教の標語がサーラーあずまやに設置されている。

聖木の脇に大公廟，ダトコン（文字）の祠，さらに Phu

Ta Yaa Kim と名付けられた善霊の祠がある。僧侶によればこの祠は kg. Nawa の人を記念したもので、村人によって作られたという。kg. Nawa はこの寺より北にあり、マレー人の村であるが、名前が記すようにかつてはタイ語を話すサムサム村落であり、現在学校になっている場所にかつては寺があったと記録がある。

寄付像は仏陀座像のみである。台所と庫裡の改修に寄付を募っている。

村の十代の若者数名が大公廟に参拝し、僧侶の食事の祈りにあわせてしゃがみ手を合わせていた。



[写真26. 庫裏]



[写真27. 僧侶の居室]



[写真28. Puu Thaa - Yaa Kim]



[写真29. 僧侶の食事時の読経に外で手をあわせる十代の若者たち]

2) Wat Lampam

正式名称：Wat Lampam

位置情報：北緯6度6分24秒 東経100度36分90秒

標高：65m

立地と景観：クダー川の上流が Pendang 内を蛇行し Wat Senara を経て、Kubor Panjang で南北2つに分岐しているがその北部側の支流が Sungai Lampang となり、緩やかに蛇行しつつ Mukim Rambai の内陸扇状地水田地域を形作っている。Wat Lampang は標高300から500m程度の丘陵山間低地にあり、現在の主要幹線道路からはやや離れたK17号線沿いにある。水田とゴム林が入り組んだ景観である。

歴史と伝承：Lampam の名の起源は不明。伝承によれば、南タイのパタルン県にあるLampamと同一であることから、この村の人はパタルンから来たと信じられている。時期はタイのラタナコーシン朝初期にナコンシータマラートがサイブリー（クダー）を支配していた時期に兵士がやって来たのでその子孫であろうと言われる。史実では1821-1844年の間のことである。その一方で、ランパンの村の歴史は500年はたっていると信じられている。

この村も強制移住時代を記憶している。村人は一時的に Nakaへ集められてその後、帰村したが帰ってきたときには他の村と同じく村は荒れており廃墟となっていたという。帰村して寺を再建する際には、政府から若干の補償金が出たという。1963年時には村民は100家族500人。

参拝者として華人の姿が意外に多い。

僧侶：2007年現在で7名（短期出家者含む）住職はタイ語を話す地元出身者。

寺院内施設：本堂はまだ建築途中で、三層屋根になったタイ様式である。

セーマーで囲まれている。

庫裡は1995年に再建築されたコンクリート造り。庫裡内には仏像の他、タイ国王夫妻の写真とラーマ5世の肖像が飾られ、華人の寄付者の写真と名前の一覧が掲げられている。庫裡の前にはさまざまな仏教関係の催しのポスターなどタイ語、マレー語、華語で書かれたものが貼られている。台所と1967年に建てられた木像のサーラーがあり、祭のための飾り物が収納されている。

鐘楼と、8曜日の誕生仏の祠がある。

華人が多いのには理由があり、広大な寺院の一角の狭い場所に、手製の阿弥陀仏の礼拝小屋があり、非常ににぎわっている。礼拝日は毎週金曜と決まっており、線香や紙の花や果物、牛乳、花、菓子や、キンマの葉の一式など多くが捧げられ、華人式の占い一式なども並ぶ。

住職によれば、華人の礼拝者はアロースター、ペナンの他タイからもやってくるという。



[写真30. 1988建設の庫裏]



[写真31. 僧侶に読経を頼む華人系参拝者]



[写真32. 広い地内一角を借りて、
大乘仏の阿弥陀仏を祀る]



[写真33. 僧侶も時にこの堂で参拝
者と談笑する]

3) Wat Chang Deen

正式名称：Wat Chang Deng

位置情報：北緯6度6分85秒 東経100度40分77秒

標高：50m

立地と景観：クダー川支流の Sungai Tekai 沿いにある。現在の道路では Naka よりさらに東に入り南下するK502号線沿いにある。丘陵山間地の扇状地水田地域だが周りの丘陵はほとんどゴムに囲まれている。水田よりやや小高い盛土上の敷地はかなり広く、Wat Chang Deen の手前に火災で廃墟となった旧寺の残骸が見える。この場所は現在学校の校庭の一部として使われており、寺はさらに奥に移動している。

歴史と伝承：1963年の記録には登場しないが、それ以前よりある寺であると思われる。火災で廃墟になっている部分は地元民に聞くと約100年前というのが、1950年代の可能性もある。近隣にシャム人村落の kg Chang Deen があり、赤い象という意味である。Wat Chang Deen は1952年に英国軍のマラヤ共産党掃討作戦の際に、強制立ち退きを命じられたシャム人居住地域で、移住を命ぜられ、村民の意に反してマラヤ軍

兵士により、焼き払われた寺の一つである。

僧侶：2名（2009）

寺院内施設：火災後の廃墟とは別に、木造の庫裡の廃屋がめだつ。近年建てられたコンクリート造りの庫裡と本堂があるが、建築様式は一部の屋根飾りを除くとクダーの平屋民家と変わらない。セーマーはなし。庫裡の建造年は不明。ポスターなどの付属物はなく、まだ建築中とも言える。トタン屋根と木造のタイ語学校があり、生徒向けにタイ語の標語などが数枚掲げられている。

門、寄付像などはいっさい見られない。



[写真34. 焼け落ちた嘗ての庫裏]



[写真35. 現在の庫裏]



[写真36. タイ語学校の生徒たち]

4) Wat Lamdin

正式名称：Wat Lamdin

位置情報：北緯6度5分17秒 東経100度40分63秒

標高：50m

立地と景観：K502号沿いの内陸丘陵山間地の扇状地水田地帯である。

Sungai Tekai の支流である Sungai Lamdin 沿い。このあたりの景観の特徴はパルミラヤシがよく見かけられることである。かつてこの地域ではパルミラヤシの花柄から竹筒をつかって樹液を採取していた。用途は自家消費用の酒とみるのが妥当である¹。分布からは内陸の特にタイ人が集中している地域にのみパルミラ椰子の姿が目立つ。また、水路沿いにサゴ椰子をみかける地域である。近隣にマレー村落が見あたらない地域である。水田と果樹、パルミラ椰子、サゴ椰子、ビンロウ椰子、犬がうろうろしていることが典型的タイ寺院と集落の特徴である。

歴史と伝承：クダーのタイ寺院の中でもっとも古いと言われる伝承を持つ。寺の歴史は500年から600年と言われる。敷地も広く、周りの水田より幾分高台にある。Wat Lamdin はタイに残る1892年のクダー寺院記録の史料によれば、クダーでもっとも多く僧侶65名あまりを記録しており当時のクダー仏教の中心的存在であった。しかしマラヤ共産党掃討作戦遂行中の1952年、地域一帯の住民に立ち退き命令がでた。ラムディンの僧侶とタイ人集落は、 коммуニストへの接触がないことを理由としてその命令にしたがわず留まっていたが、マレー系兵士を中心とする英国部隊がラムディンにやってきて、寺内に米や油が蓄えてあることを коммуニス

¹ パルミラが見られるのは近隣では南タイのパタルン=ナコンシータマラート周辺の光景である。パタルンでは樹液を煮詰めて砂糖として使用するか、生食用である。

トへの支援物資と見なして、集落民の抗議にも係わらず、寺に火を書けて焼いた。このときに寺の仏像から古文書、金銀の仏具まで含めて失われたという。この時期に同様の被害にあったのが、Wat Lamdin, Wat Chang deen である。事件はベナンのタイ領事からタイ国に報告され、あらかじめクダのタイ寺院には手を加えない事という約束事があったことを確認し、タイとマラヤ間の国際問題となった。被害をうけた寺院には幾分かの賠償金がでた。

僧 侶：4名（2007年）

寺院内施設：寺院内のものはすべて1960年代以降に立て直されたものである。

今の本堂にはセーマーはないが、古いセーマーが集められ、巨木のもとに集められて祀られている。現在の施設は礼拝堂、庫裡、台所。鐘楼。旗竿。門。池（水なし）
寄付像としては ルシ像、出家女性像。



[写真37. 礼拝堂と鐘楼と旗竿]



[写真38. 寺の前の村落風景]

5) Wat Nangka Siam

正式名称：Wat Wanakrattanaram

位置情報：北緯6度3分45秒 東経100度33分72秒

標高：51m

立地と景観：Wat Senara から内陸へ続くK127号線沿いにある。この道は東進して Kg. Cina にあるタイ寺院につながる。内陸丘陵間地の比較的広い水田地域である。小河川である Sungai Pdg Kerbau が水田地域を横切る。Kg. Nangka Siam の隣には Kg. Nangka Melayu があり、1950年代の強制移住時代にマレー系、タイ系の住民が集められた場所である。

歴史と伝承：水田地域のただ中にあり隣接する集落は見当たらない。強制移住地ではあったが期間がすぎると元の村へ帰った住民が多いらしい。

僧侶：僧侶1名。以前はタイから3名僧侶が来ていたことがあるが3ヶ月でタイに戻った。

寺院内施設：境内は広いが簡素である。コンクリート作りの本堂とトタン屋根の庫裏が一つである。本堂の中にもタイから買ってきたと思われる仏像が一体のみである。門もなし。寄付像の類いもない。言い換えれば、集落の人々が日常的に訪れる形跡があまり見られない。



[写真39. Wat Nangka Siam の本堂]



[写真40. 庫裏]



[写真41. 本堂内の仏像]

6) Wat Nanai

正式名称：Wat Nanai (Tok Set)

位置情報：北緯6度4分56秒 東経100度36分52秒

標 高：23m

立地と景観：ランガーから東へ向かうK8道路がNakaに至る手前のK17道路を南下すると Wat Lampan の次に見える所である。K17道路から1キロほど水田内にはいった小高いところにある。Kg. Tok Set の寺とも呼ばれる。Na Naiはそのタイ語名で「中の田」という意味である。寺を示す看板がたち、誘導路は2008年に舗装されたばかりである。

プンダン内陸部の小河川が入り組む丘陵間低地。河川はSg.Lampam。自然傾斜による扇状地の水田地域で、ゴム林の丘陵に囲まれている。集落はゴム林の際にある。Na Nai(中の水田)の名のとおり、プンダンのシャム人の住む地域の真ん中あたりに位置する。このあたりは、Wat Lamdinと同じく典型的なシャム人村落のアイコン的景観をもつ。すなわち、水路のサゴヤシ、集落の家の周囲のパルミラヤシ、ピンロウジュ、犬がうろうろする光景である。

歴史と伝承：若い僧侶によれば、600年の伝承をもつという。それ以前の歴史記録には名前が残っていないため、確認できない。

僧侶：僧侶1名（2007）。この僧侶は地元出身で、マレー語を理解し、標準タイ語も理解する。しかし本人がタイにいったのは観光旅行程度であるという。2009年には3名を見かけた。

寺院内施設：2007年の訪問時には Selamat Datang（マレー語）と Jindii thong rap（タイ文字；何れも Welcome の意味）が書かれた簡素な門構えであったが、門と本堂の立て替え寄付を募っており、2009年にはタイ風の門の建築途中であった。また本堂も木組みがされて建築中である。僧侶も増えている。敷地は広いが、建築中の本堂と完成した庫裡、台所、サーラーのほかは古い木造の庫裡の一部に鐘がさがっているのみ。寄付像などはなし。



[写真42. 2007年時の簡素な門構え]



[写真43. 2007年の庫裏と住職]

7) Wat Kg. Cina (Pdg Kerbau)

正式名称：Wat Phothichediaram (Wat Thung Khwaai)

位置情報：北緯6度3分14秒 東経100度36分56秒

標 高：36m

立地と景観：K17を南下し、K127との変形3叉路となる地点にある。東側は丘陵でゴム林であり西側は内陸丘陵間低地の広大な扇状地水田がある。寺の周囲はマレー人集落とシャム人集落が混じっている。寺の入り口は常にこの地域の農業コンバインの置き場でもある。

歴史と伝承：もとはPadang Kerbau, タイ語で Thung Khwaai と呼ばれた場所であるが、今は, kg. Cina と呼ぶ。シャム人村落の人口は300家族くらいあり, kg. Titi Akar に次ぐといわれる。

僧 侶：2009年時点の僧侶は5名で、4名がタイからきている。住職はすでに20年をつとめる。地元の僧侶は1名で2009年の5月に入ったばかりである。その他の僧侶の出身はナコンサワンやバンコクで、地元の人々との会話はタイ語で不自由はない。

寺院内施設：敷地が大きいこともあって、寺院の施設は充実しつつある。90年代から門, ウィハーン (説教堂), 本堂, などの改修を進めてきた。光るモザイクタイルを貼付けたタイ国内で見かけるきらびやかな装飾様式で、釣り鐘型の金に輝く仏塔がある。納骨堂と思われるが華人色はない。この仏塔は地域のランドマーク的景観になっている。寺の建築の様式は規範があるわけではなく僧侶の要請で決まる。2009年の訪問時には住職がソクラーから呼んだ寺院建築の設計家と新しい本堂の建築様式の相談中であった。住職の知っている様式, あるいはその趣味で建築様式が決まるのは近年の新築建造物にしばしば見られる傾向である。

木の根元に人口洞窟を模したものがありルシ像が安置。仮の小屋に先代の住職座像6体が並び、その横に修行仏立像。土の固まりに黄色い布をかけた土地神プートンのほこらがある。



[写真44. 目立つ仏塔のあるウィハーン]



[写真45. 仮小屋に安置された先代の住職像と修行仏立像の寄付像]



[写真46. 講堂]

8) Wat Tong Phru

正式名称：Wat Sunthornpracaram (Samnaksom)

位置情報：北緯6度2分33秒 東経100度36分74秒

標高：23m

立地と景観：K17をさらに南下する。もっとも古いシャム人居住地域の一角である。この寺は近年丘陵のゴム林を切り崩してできた建築物部分が異彩を放っているが、実は、1キロほど北の場所が元の寺の跡であり、現在地は移動された場所である。寺の東側は水田，パルミラヤシが数本。

Wat Tong Phru の元の場所は、1キロほどK17の北にあるゴム林の中である。道端にブートン（善霊廟）があり、今も信仰を集めている。古い寺の後には寝釈迦の絵を描いた木造の小屋と住職の墓が見える。しかし、現在の場所にはかなり派手な門と丘陵地に作られた仏教庭園が目立つ。

歴史と伝承：Wat Tong Phru の起源について先代住職の縁戚である老人から話を聞いた。ここの出身の僧侶がアロースターでりっぱな寺をみてこのようにしたいとおもい、タンブン（寄付）をつのって、アロースターの中国人たちからの寄付をえて、このように作ったという。これが一代目の僧であり名前が Lo Pho Hok, 二代目はその甥 Lo Pho Hat が出家してつくった。Kalai の寺と関係が深い。だいたい100年くらいという。1952年の強制移住をこの寺は経験している。Naka への移住期間が終わった後、戻ってきて現在の場所に寺を作り直したということである。

村は30軒というからあまり大きくない。寺の世話をするのは5人である。ここまでの情報収集はタイ語で行っているが、地元民は話せるけれど書くことはできない、南タイ方言話者である。

寺にやってくるのはタイ人と中国人である。大口の寄付はほとんど中国人であった。kg. Cina からの寄付が多いというが、アロースター、ペナンなどからの様々な寄付がある。僧侶は、シャム人、中国人のほかに Melayu Ciin がくる、という言い方をした。サムサムのことであると思われるが仏教徒である。

僧 侶：今の僧が3代目であるがタイのロップリ出身のタイ人である。ここに来て2年である、住職1名。僧侶はここでタイ語を教えている。

寺院内施設：本堂と庫裡，火葬場がある。本堂と庫裡はクダーの一般民家の作りに似ていて特段にタイ的ではない。しかし，2001年の銘のある門はタイの国旗の色合いを模した屋根のついたきらびやかなものである。寺内で目立つのは近年作られた仏教庭園と誕生日仏である。

クダーで見かける誕生日仏は普通8体の仏像を並べた8曜日であるが，ここの仏は7体7曜日で，それぞれタイルでSUN, MON, TUE, WED と対応する曜日が書かれているが，水曜仏がひとつしかない。これは寄付して作った華人の寄付者がタイ本国での7曜日の形式になったものである。仏教庭園と名付けたものは，コンクリート作りの立像で作った釈迦の一生を描いた広い庭園である。散歩者が丘の斜面を登ると髪を切って出家する釈迦像から苦行像，解脱，説法，涅槃の順に小屋に書かれた絵画と立像の組合わせに出会う仕掛けである。なおこの寺の方針ですべての寄付像に寄付金額と寄付名が書かれており，たとえば，街灯一本800リングットを5名の華人寄付者でまかなっていることがわかる。

その他寄付像としてルシ像，修行僧立像があるが，いずれも新しく2000年以降のものである。2008年には四面仏像が加わった。なお，門の左部斜面に住職の墓が複数みられたが，2007年にはそのまわりの草地を伐採して多くの華人墓がたてられた。この寺に火葬場があることから，華人の墓地としてさらに多くの場所が提供されるようになっていることがわかる。



[写真47. 誕生仏と四面仏]



[写真48. 火葬場と庫裏]



[写真49. 住職墓柱とその近所の華人墓]



[写真50. ゴム園の脇にあるプートン(善霊)の祠。常に供え物がある。]

9) Wat Titi Akar (Palee lamai)

正式名称：Wat Visutthipradittharam

位置情報：北緯6度0分91秒 東経100度37分00秒

標 高：42m

立地と景観：クダー中部の内陸部には標高800mほどのブキットペラと呼ぶ山がありクダー北東部の山脈を源流とするムダ川がその東側を南下しクダーの中央を南部へ蛇行する。ブキットペラとそれにつらなる標高200mの丘陵地の西側の裾野に古いシャム人集落が集中しているが、通称 Wat Titi Akar は

その中で最も古い寺院の一つであり、過去から現在に至るまで人口規模も大きい。丘陵部分はほぼゴム林で覆われているが丘陵間地は豊かな扇状地水田である。水田は広いが高低差があり、大きな排水水路はみあたらない。パルミラヤシ、ビンロウ樹、サゴヤシがみられる。Wat Titi AkarはK17号道路沿いにあり、Wat Tong Phruが最も近い寺となるが、間にはマレー人農村が混じる地域である。

歴史と伝承：村の歴史は地域ではもっとも古いと伝承され、約500年という返事が帰ってくる。1963年の調査では300家族1200人といわれているが、2008年でも300家族程度である。寺はラーマ5世の時代にたてられたといわれ、約150年ほどであると伝承される。

強制移住の時もこの寺の移住はなく、したがってその間荒らされることもなかった。村からの移住対象者は150名ほどであったが、期間が済むと戻ってきたものが多かったという。

僧侶：1963年の記録では地元出身の僧侶8名。見習い僧が3名であったが、2008年では地元出身の住職60才を筆頭に10名がいる。うち2名はバンコクとナコンシータマラート出身の若い僧侶で、三ヶ月から一年の修行でやってくるという。僧侶の食事は、村のものが毎朝10時半くらいに台所にやってきて調理する。食事当番があり、村人は僧侶の食事の後まで残って読経を聴き、後始末して帰る。

寺院内施設：地元のシャム人に支えられている簡素な作りの寺であり、古くから学校をもっているが、敷地はかなり広い。木造で高床式になっている説教堂はまだ現役である。また、本堂は平屋のスレートコンクリート作りであるが、1970年代頃に改修されたものとおもわれ、セーマーで囲まれている。実際住職は日中ここにいることが多い。

その他、古びてはいるがまだ現役と思われる、高床式で木の皮で屋根が葺かれ、彩色ニッパの編み込み壁（デザインは南タイで見られるものと同じ）の庫裡がある。近年コンクリート作りの講堂、など二棟が奥に立てられた。経堂が立てられたのは1992年である。

門は永らく木造トタン屋根の簡素な門であったが、2007年から3年かけて、改修し、塀の一部とともに現在はタイ風の門になった。調査期間中、ちょうど建築中にタイから雇われた労働者5名（男性3名女性2名）と会った。彼らはソクラーからここに来ており、建築中は前の家に寝泊まりしている。ここの仕事が済むとよそに移ることもあるが、一年ごとに労働ビザの更新をしなければならず面倒であるともいう。

学校は1961年から始まった地元タイ人のためのタイ語学校である。タイの教科書を使い4学年まで教える。

ルシ像はあるが、その他の寄付像は見当たらず、いわば華人色が全くない。

道をわたったところにプートンが2基あり、その周りが一種の納骨堂となっているが数は少数である。

地域のコミュニティセンターとしての機能も期待されているらしく、2008年には寺内の一部の敷地に地域の図書館が立てられている。



[写真51. 木造の講堂]



[写真52. 本堂]



[写真53. 2007年、改修中の門と労働者]



[写真54. 2010年、完成した門]

10) Wat Pdg Pusing

正式名称：Wat Thamkhiriwon

位置情報：北緯5度57分71秒 東経100度31分58秒

標高：21m

立地と景観：プンダン市街から約6キロ内奥にある。マラッカ海峡に開くSala川河口の海岸の交易所であったコタ・サラン・スムット（Kota Salang Semut）からほぼまっすぐ東にのびるK366号、K128号線からプンダン川の交易拠点 Kg Tok Busah の南からK151号線で5キロ程度のところの支流沿い

に位置する。ちょうど海岸部の標高4mの低地水田（Sawa Melayu）が終わり、内陸丘陵地にさしかかる境にあり、寺の近所には大きなイスラームのポンドック（Pondok：宗教学校）があるなど、農村というより内陸と沿岸を結ぶ市の立つ分岐点である。

歴史と伝承：タイ名は Nakhon Pusing と言い、街として認識されている。kg. Padang Peliang と関係が深く兄弟村状態であるともいわれる。

寺の創始者はわからないが、1919年に創立50年として記念式典を行っているので、1869年頃の建立ということであろう。内奥地ではないため、強制移住の経験はない。むしろ、kg. Padang Peliang からの移住者を受け入れたという。

住民は1963年の記録では150家族600人。

僧 侶：1963年の記録で僧侶は9名で見習い僧が4名、住職は地元出身である。

寺院内施設：かなり広く境内に広場がある。建物は全部がコンクリート作りでほぼ80年代から90年代に改修、建立されたものである。

本堂は奥のほうにありコンクリート平屋づくりの二層屋根になっていてセーマーがあるが、装飾などはなく簡素である。庫裡は80年代から90年代に立て直されたものでタイ様式の装飾が少し見られる。

学校施設があるが、建築様式は70-80年代のコンクリート造りである。

また、マノーラ舞踊のグループがあり講演も行っている。仏教行事とともにロイカトーンなどの行事もあり、その際には敷地内に大きな市が立つ。

寄付像としては、小ぶりのルシ像がある程度である。また、

椅子やベンチなどの寄付があるが、その寄付名にはコタ・サラン・スムットにある会社の名前がはいっている。



[写真55. 現代タイ風の装飾門]



[写真56. ロイカトーンの市の準備中]



[写真57. 本堂と祭りの舞台]



[写真58. ルシ像]

11) Wat Padang Peliang

正式名称：Wat Thepsuwannaram

位置情報：北緯5度57分73秒 東経100度34分99秒

標高：36m

立地と景観：K151号道路をさらに東に4kmほどの3叉路で、南に目立つモスクがある小道K507を奥へ200メートルほどはいったところにある。手前がマレー人集落でその奥にシャム人集

落がある。シャム人の居住地として古くから記録に名前のあるところだが、Wat Senara の例のように、現在の道路からはわかりにくい。現在のクダーの道路の光景はまずモスクがみつきり、その奥の隘路をたどるとタイ寺院やシャム人集落に到る構造に作られたケースが多く、タイ寺院の場所は道路主体で考えるとわかりにくい。水路で考えると、Padang Peliang は Wat Senara の上流に位置することになる。その更に北5kmのところに Wat Titi Akar があり、ここもまた古くからのシャム人居住地である。

歴史と伝承：1963年の記録では村の歴史は300年。2008年の調査でも280年という答えが得られた。シャムのどこからきたかという伝承は伝わっていない。1963年当時は300家族で1200人。2008年では180家ということである。寺は伝承では200年以上前から存在していたという。

強制移住の時代には Padang Pusing に移住させられたが5年で元村に戻ることが許された。そのときに移住先に落着いた人もあれば、他のシャム人の村へ行ったものもあり、さまざまである。村は Suhong Tiangと呼ばれている。

村はシャム人同士の結婚が多く、華人と結婚する例はほとんどないという。村人の職業は農村のほとんどがそうであるように水田とゴムの両方である。

僧侶：地元出身の住職は54才。出家して44年になるという。タイを訪問した経験があり、バンコク、チエンマイ、ハジャイなどを知っているという。寺の僧侶は6名ですべて地元出身者である。3ヶ月程度の短期出家者がよそからやってくることはある。

1963年の記録でも僧侶は7名だったが、当時は寺内にタイ語の学校があった。

寺の行事の他にロイカトーンの祭りやマノーラ舞踊を行っ

ている。

寺院内施設：本堂は全面的に立て直された真新しいものになっており、タイの様式になっていた。セーマーで囲まれた上に、おおきな囲いがついている。また3重屋根の経堂や学校に使用していた講堂、昔学校として使っていたタイ文字がコンクリートで浮き彫りになっているサーラーなどがある。

庫裡もまた建築中。

寄付像はコンクリート作りの仏陀座像ひとつである。華人の参拝も多くなったというが、特段に目立つ華人的なものは見当たらない。

住職の墓が9基ほど並ぶ。



[写真59. ごく近年に建てられた先代住職像の祠]

12) Wat Mak Inson (Maisong)

正式名称：Wat Thepbandit

位置情報：北緯5度57分34秒 東経100度31分95秒

標高：29m

立地と景観：Padang Pusing より南だが同じ Pendang 川の支流に近い。

周りは丘陵地でゴム林に囲まれたせまい水田地域である。

K419号道路沿いにある。川を水路として交通につかったことはなく道はかつて水田の中をとおる一本しかなかった。これより南はゴムエステートと FELDA 開拓村落地域になる。

歴史と伝承：村の起源は100年以上ということしかわからない。今の寺は再建して80年程になる。住民の記憶では日本軍との戦争直前に住民の安全のためということで村も寺も移住させられ南の kg. Padang Lembu に集められた。58年くらいまでそこにいてそののち帰村し寺と村を作りなおした。村の規模は150世帯程である。

僧侶：1963年当時の僧侶は7名でサミは10名。2009年は僧侶が短期出家者含めて13名である。

寺院内施設：本堂はごく近年2008年に立て直しが完成してもっとも新しいタイの様式になっている。その他礼拝堂，説教堂，庫裏が共同の大きいものと短期出家用の木造のものがいくつか。台所と食堂がある。

1963年にはタイ語の学校はなかったが2008年では学校でタイ語を教えておりバンコクからきた僧侶が教えている。すでに20年以上になる。そのため僧侶は昼食のあと午後4時まで休息をとってその後タイ語クラスを始める。

講堂の中に仏座像があり背後と横にブツダの一生の壁画があるがその他の寄付像はない。

2009年には調査中，タンブンにきたアロースターからの華人一家と共に読経と祝福の水を受けた。華人一家は水と米を持参。のち，華人一家は村の食事にあわせて持参した料理果物菓子を添えて共々僧侶の食事時，村人とともに脇に控えた。聞くと，この寺だけではなくさまざまなクダの寺へタンブンに行くという。



[写真60. 木造の庫裏]



[写真61. 僧侶より祝福の聖水を掛けられる]



[写真62. 僧侶の食事中に床で待機する村人]

13) Wat Bukit Perak

正式名称：Wat Ratchakhiri

位置情報：北緯5度55分22秒 東経100度38分20秒

標高：59m

立地と景観：クダー中央の800m級の山ブキット・ペラの南麓にある。変形三叉路の交点にある。ブキット・ペラの西側麓のシャム人集落と東側麓のシャム人集落を結ぶK151道路上にある。1キロほど先に山の石灰石採取場がある。

歴史と伝承：2007年のリストによれば Samnak 扱いである。常住の住職

がない場合もあると思われる。寺の作りは少なくとも1960年代には成立していた建物である。1963年の記録にも見当たらない。

僧 侶：地元の華人に聞くと2007年には4名の僧侶がいた。地元出身者が1名であとは華人系とタイ人。タイ人2名はタイへ帰ってしまったとのこと。短期で滞在するタイ人僧侶はマレー語ができないし、その華人もあまりタイ語はできないという。

寺院内施設：敷地はさほど大きくない。目立つ仏塔があり納骨堂を兼ねている。鉄骨作りの庫裏と台所、講堂がある。ここではタイ語の教育が受けられないため子供らは Wat Kura の方まで教育を受けに行くと聞いた。Wat Kura は Sik にありブキット・ペラの東側を北上したところにある大きな寺である。

華人の寄付した大きな観音像がある。コンクリート作りで、その近辺に象の像と虎の像（コンクリート作り）がある。



[写真63. 寺の門は木造で古い]



[写真64. 華人の寄贈した観音像]



[写真65. 仏塔]

追記1：本稿は科学研究費補助金による調査「マレー領域におけるタイ人コミュニティの研究」（課題番号）2007-2009による成果の一部である。

追記2：水田景観の分析については桜井由躬雄（文学博士，農学博士）から貴重な助言と示唆を受けた。厚く御礼申し上げたい。

クダーにおけるシャム人とタイ仏教寺院：寺院調査から（3）に続く。